

自我論は何を課題とすべきか

——相互行為論と自我論——

石川洋明

社会学における自我論の主要な業績のひとつに、シンボリック相互作用論に代表される「I-me」理論をあげることができる。しかしこれは、個人—社会二元論を人間の内面に読みこんだもので、シンボリック相互作用論においては、主体性の賞揚と結びついて楽観的な人間—社会観を導出しがちであり、記述の精密さに欠ける。それに対し、Goffman による論考は、日常生活における「演技」への着目により、単純な「I-me」理論と比較して、自己意識および行為のより精密な記述を提供する。そして本稿では、特に後期 Goffman に見られる問題意識の転回をさらにおしすすめることにより、自我論の新しい方向——一人称的な「自我論」から三人称的な「自己現象の社会学」へ——が探究される。

I. シンボリック相互作用論

過去の社会学説の蓄積のうちで、「自己」「自我」という概念であらわされる現象について最も積極的な考究を行なったのは、シンボリック相互作用論であった。シンボリック相互作用論は、Parsons 流の構造—機能主義社会理論が描き出す「過社会化された人間像」(Wrong [1961]) に対する批判・代案を担うものとして登場した。よって、彼らの議論のなかで最も強調されているのは人間の主体性の賞揚であることは言うまでもない。しかし、シンボリック相互作用論の諸論考は、個人—社会二元論を基調として残存させつつ人間主体性を顕彰しようとしたため、種々の難点・限界をもち、その構造—機能主義社会理論批判も誠に限られた効果しか及ぼすことができなかつたといえよう。以下、シンボリック相互作用論の基本的な論理構成を明らかにしつつ、その限界の画定を行なう。

シンボリック相互作用論の論理は、G.H.Mead のアイディアを直接の基礎としつつ、それを主体性を賞揚する形で読みかえることによって成

り立っている。なかでも重要なのは Mead の「有意味シンボル」概念 (Mead [1934=1973: 74 ff]) および「I-me」図式 (Mead [1934=1973: 186 ff]) である。まず、前者の「有意味シンボル」概念であるが、Mead のコミュニケーション論においてこの概念は中核的なものである。すなわち、彼の「マインド」論の中軸である「他者の態度取得」論は、「有意味シンボル」の成立によって、他者のうける反応=態度がそのまま自己の反応になる、他者と同じ反応が自己のなかにもひきおこされる、ということを通じて述べているが、この「有意味シンボル」そのものは、他の動物と比較した際に人間に特有に与えられているものであり、いわば所与の社会的事実といえる。よって、Mead においてコミュニケーションの可能性を保証するのが、この「有意味シンボル」概念ということになる⁽¹⁾。そしてまたシンボリック相互作用論においても、この議論は全面的に継承されている。

一方、「I-me」図式については、Mead 自身が厳密な定式化を行なわなかつたため、後継研究者の間で論争が絶えない。「me」は他者の

態度を取得し内面化したものすなわち役割期待である、という理解はほぼ全ての論者に認められているのに対し、「I」が何であるかについては、「me」に対する単なる残余である、とする派と、「me」に対し独立して主体的に働きかけるものである、とする派の二つが対立している。Lewis〔1979〕の整理にしたがい、前者を残余派、後者を修正派と呼ぶことにしよう。残余派は実質的な議論を「me」の方に限ろうとする立場であり、修正派は、「I」を生物学的衝動や人間の個人的側面と考へて、「I」を議論のなかに含んでおくことによって社会決定論を修正しようとする立場である。

シンボリック相互作用論は、上記の整理に照らしていえば、修正派、しかも「I」を生物学的衝動以上のものとして想定する立場をとるといえる。彼らの議論の重点である主体性の発想のエージェントとして実体的な「I」を規定するのだ。そして、その主体性の発現は「解釈」あるいは「役割形成」という概念であらわされている（↳ Blumer〔1969〕、Turner〔1962〕、船津〔1976〕〔1983〕など）。これは、「有意味シンボル」によって可能になる意味の表示＝対自的な再認を基盤に、相互作用局面において他者の役割期待を自動的に遂行するのではなく、表示→役割期待の変形（解釈）というプロセスを描くものである。

しかしながら、この^{アプローチ}接近法に対しては既に様々な批判がなされている。最も代表的な批判は「小状況の分析にのみ力点がおかれた社会構造への目配りを欠いているマイクロ理論」といった類のものであり、また、注目すべきものとして、「シンボリック相互作用論はコンセンサス・セオリーに過ぎない」という批判（↳ 佐藤〔1978：42〕）があげられる。ともに正当な批判である。これらの批判は、シンボリック

ク相互作用論の事実に業績のみならず、論理構成に対する内在的な批判としても妥当する。すなわち、上記のように、シンボリック相互作用論は「有意味シンボル」論によるコミュニケーションの記述と、「I-me」図式における「I」の積極的位置づけによってその社会理論を構成している。これは、役割理論などの文脈においても同様であり、いわば、社会および個人という二つの実体を対置させた、二元論的な構成をとっているのである。この二元論的構成は、シンボリック相互作用論が最大の論敵と考へていた構造一機能理論の泰斗 Parsons もとっていた。しかし、Parsons は、無制約な個人の行動の集積は無秩序状態を招来する、という Hobbes 問題にぶつかり、個人の側に分有された共通価値を論点先取的に書き入れる、という形でこの秩序問題を解決せざるを得なかった（↳ 厚東〔1970〕、恒松・橋爪・志田〔1982〕、山下〔1983〕など）。Parsons の議論に対しては、社会化・社会統制に対する過剰な注目、という点よりも、社会一人二元論を脱却できなかつた、というより根本的な点に問題を感じざるをえないが、シンボリック相互作用論は、結局その根本的な問題に着目することなく、個人の側の主体性のみを強調したに過ぎない。したがって、個人と社会（あるいは「I」と「me」）がぶつかるときには個人の側に^{アドバンテージ}優越性を付与するため、このような楽観的な描像が現実整合的であるのは小状況のみにいてである、という「マイクロ理論」批判が妥当する。また、「有意味シンボル」によるコミュニケーション可能性の保証を拡大解釈し、「I」と「me」がぶつかっても（「I」を賞揚する形で）コミュニケーションにおける合意が成り立つ、という「コンセンサス・セオリー」的構成にも「小状況主義」を読みとることができる。シンボリック相互作用論者は、しばしば、社会

が個人の主体的解釈を拒む固いものではないと考えることによって(↳ Turner〔1962: 22 ff〕)あるいは《社会的リアリティは何も予め定められていない自由に流動する過程のなかで構築されるものだといった視点》(佐藤〔1985: 207〕)をとることによってその論理整合性を保とうとしてきたが、そのような一面的な前提は、やはり認め難いものである。

以上、シンボリック相互作用論の、主に社会全体に関する分析に対して批判が行なわれた。それに関連して、彼らの自我論への批判を行なうことができる。シンボリック相互作用論の自我あるいは自己に対する記述は、「I-me」図式に依拠したものであるが、このうち「me」は他者の役割期待すなわち社会的な要請、「I」はそれに対し能動的にはたらく実体的な項、という構成をとることは先に述べた。彼らの分析が、「I」を強調し、「I」が「me」を解釈・改変する形での合意・役割の遂行に至る、という論理構成のために「楽観的な小状況主義」とでもいうべきものになってしまう、という先に述べたものと同型の批判はもちろん可能だが、より重要なものとして、「I」と「me」の境界の問題をあげたい。

シンボリック相互作用論者は「I-me」論争における修正派の立場にあることは先に述べたが、論者によって多少の違いはあるものの、生物学的側面よりも社会的形成物としての自我を強調することにおいても彼らは共通している。それが最も端的に現われているのが船津衛の議論であるが、彼は、「I-me」を生物学的衝動と社会的形成物として分割する従来の議論を廃し、「創発的内省性」という概念をたてつつ、主我(=「I」)が社会的形成物であることを明言した(↳ 船津〔1983〕)。しかし、この方向で議論をすすめるときには、主我と客我、「I」と

「me」の境界をどこにおくのか、ということが必ず問題になる。もし「I」と「me」との境界が確定されないならば、「I」と「me」という二項を独立に立て、「Iによるmeへの反作用」と語るのは無意味である。然るに、船津はこの問題に対して答えていない。彼の行論からは、おそらく「I」と「me」は行為者の意識に定位して区別するのであろう、ということが推測されるが、それでは、その、「I」の意識と「me」の意識はどこで区別されるか、という問題が出てきてしまう⁽²⁾。この意識の様態を記述・説明するのが自我論の大きな課題なのだから、これを未解決のままに置いておくのは重大な欠落だと思われる。

シンボリック相互作用論において「I」は実体項であり、論理構成上はいわば所与なのであるから、その内容が問いきれないのはむしろ当然かもしれない。このような論理構成は、自らの心的過程において、投企の端点・アイデンティティの投錨地たる「I」と、それに対して外在的かつしばしば拘束的にはたらく「me」とを区別するわれわれの経験に深く根ざしており、その経験を一人称的な独白のスタイルで記述しようとする態度から生じたものである。しかし、経験の一人称的な記述およびその手段となる反省に過剰な信頼をおくこの方法は、上記のような弱点をもつのだ。自我論、すなわち自己意識のより正確な記述・説明のために、新たな方向が模索されねばならない。

II. Goffman の社会理論

Goffman の社会理論は、小状況における行為およびそれに伴う心的過程の詳細な記述にその特徴を見ることができる。従来、彼の分析は、ドラマトウルギカル・アプローチ「演劇論的接近」という彼自身の命名に従い、

日常生活において行為者が自己を呈示する＝演技する、その方法に関する記述分析である、と位置づけられてきた。確かに、Goffman の諸著作は、一貫して、状況およびその一部をなす行為者の属性・行為を記述することにその紙幅の大部分が費やされている。しかし、その際の視点には、特に行為に伴う心的過程の記述に関連して、微妙な変化が見られることに注意しなければならない。Goffman の文体は同一の著作の内でも多様かつ曖昧ではあるが、彼の分析上の視点は二つの極の間を揺れ動いているものと考えられる。一方の極は主体中心的・要素主義的・演技（演出）論的な視角、そしてもう一方の極は規則中心的・構造論的・コミュニケーション論的な視角、ということができよう⁽³⁾。そして、大まかに言って、前者の極に重点がおかれていた前期から、後者の極へ重点を移してきた後期、という形で彼の議論の変遷をとらえることができる。前期の議論を代表するものとして『日常生活における自己呈示』（Goffman〔1959〕）を、後期の議論への転回点をなすものとして『フレーム・アナリシス』（Goffman〔1974〕）をあげておこう。以下、その異同が明らかになるように、それぞれの視角について検討してゆきたい。

II-(1). 前期 Goffman

前期 Goffman において、彼の^{アプローチ}接近法が端的に示される中心的な概念は「演技」であり「自己呈示」である。すなわち、日常生活における諸行為を、行為者の、主に意図的な操作によるものとしてとらえたことにその特徴がある。このような把握は、演劇のメタファーに基くものではあるが、行為の詳細な観察、特に、中心的な行為のみならず、その周辺にあって当該の行為

を「それらしく」見せるような属性・行為に対する目配りを通じてより鮮やかな把握となっている。そして、これにより、装ったり欺いたりするような行為のより正確な描写が可能になったが、それはとりもなおさず、表出＝顕示的遂行と意図＝内面における心的過程との乖離をも分析の俎上にのせることへと議論を導いてゆく。

Goffman の場合、表出と意図の関係は、意図に応じて表出を工夫する、という形で定式化できる。「演技する」あるいは「自己を呈示する」というお馴染みの表現もこの定式を反映したものである。彼の分析の文体は、基本的に「ある印象を伝達するためにはこういう操作を行わなければならない」という目的論的なものであり、かつ、その操作を行なうのは個別的な身体なのであるから、その目的は個人の意図と一致することになるのだ。

ただし、その意図の内容については Goffman の記述は多様である。たとえば、『日常生活における自己呈示』においては、Goffman は《自己本位的な相互行為の局面へ執拗な着目を試みた》（佐藤〔1985：209〕、強調は引用者）、という位置づけは今や衆目の一致するところである⁽⁴⁾。一方、同じく初期の著作である『公の場所における振舞』において Goffman は、《すべての状況にあてはまる行為の規則は、「状況にふさわしい」行為をせよということ》（Goffman〔1963b=1980：12〕）と、状況規範の重要性を確認し、特に対面的状況における状況規範を維持するためにどのような行為が行なわれなければならないか、あるいは行なわれてはならないかについて、詳細な分析を行なっている。つまり、彼のこの分析によって描かれる行為者は、状況規範を維持することを意図して行為しているのである。あるいは、Goffman の提出したもうひとつの重要な概念「役割距離」についても上記のよ

うな意図の多様性が指摘できる。役割距離は「個人とその個人が担っていると想定される役割との間に「効果的に」表現されている鋭い乖離」(Goffman [1961a=1985: 115])と定義されているが、Goffman が描写している例でいえば、手術室における主任外科医とインターンがそれぞれとる役割距離行為は、明らかに異なる意図を持つ。すなわち、主任外科医はその場の空気をやわらげようとして冗談じみた行為を行ないつつ役割距離を示すのに対し、若いインターン、あるいはメリーゴーラウンドの例に描かれている5～6歳児は、自分の能力はより高いものである、ということを示すべく役割距離行為を行なうのである。

このように、Goffman の分析した行為について、その行為が遂行され諸属性が表出される際の意図という観点から分類ができる。厳密な区別が成しうるかどうかは難しいところであるが、とりあえず、利己的動機によるものと非利己的動機によるものという二分法を立てておこう。

ところで、以上の考察で、多様な意図を含む、という観点からは共通するものとして扱ってきた「自己呈示」と「役割距離」には、当然のことながら異った面がある。特に重要な差異は、「自己呈示」的行為が主に状況規範に整合的な行為・属性を表出することによって行なわれるのに対し、「役割距離」的行為は状況規範とは部分的に異なった表出を以ってなされることである。この二分法と、上述の意図における二分法とを組みあわせ、Goffman の前期において分析されている行為の諸類型を整理するならば、以下の図のようなになる⁽⁵⁾。この図を以って、前期 Goffman の分析の簡単な見取り図とすることができよう。

意図 \ 状況規範との関係	整合性維持	部分的変更
利己的	自己呈示 戦略的行為 ⁽⁶⁾ 身元隠し (潜在的逸脱者) ⁽⁷⁾	能力暗示型 役割距離
非利己的	儀礼	状況通過型 役割距離

以上のような前期 Goffman の分析に対して、どのような評価を下すべきであろうか。先にも述べたように、前期 Goffman は、日常生活における諸行為を行為者による意図的な操作・表出ととらえたことにその特徴があり、その点に関連してメリットもデメリットも考えることができる。まずメリットであるが、「演技する」という行為を射程に入れることによって、コミュニケーションあるいは相互行為の記述がより精密になったことがあげられる。そして、その論理的な系^{コグニティブ}として、相互行為に登場する行為者の内実、すなわち自我と目されるものが、シンボリック相互作用論が想定しがちである無限定な主体性でも、Parsons の議論などから導出されがちな「過社会化された人間像」でもない、より微妙なものとして規定しうる、という可能性をひらいたこともメリットとして考えてよいだろう。しかしながら、デメリットあるいは限界と言うべきものも、まさにその点に関連して見出される。

第一の難点は、社会全体の記述に関するものである。江原由美子は、Goffman の「演劇論的」社会理論において、その「演劇性」の根拠が行為者の「演技する意志」に求められる、という記述を行なっている(江原[1982: 65])が、これは先に指摘した「意図に応じて表出を操作する」という Goffman の文体を正確にとらえ

たものである。江原は、このような Goffman の視角の切れ味を認めながらも、《枠組が「社会」=現実、「演劇」=虚構という図式の上に成立しているために、一般化することによってたちらどこに自己矛盾に陥ってしまう》(江原〔1982 : 69〕)という悲観的な評価を下している。この評価は正当なものであるが、以下のようにパラフレーズすることによりその含意がより明確になる。すなわち、Goffman は、彼の分析において、通常の実／虚構の二分法のうえに、われわれが現実と考えるもの内にも作為性=虚構性が入りこんでくることを示したといえるが、これでは「すべて虚構である」と言ったのに等しく、演技する意志さえあればどこでも演劇=虚構が成立してしまうことになる。これは、たとえば行為者の主観的リアリティに関しては確かに妥当することであるが、客観的な、社会的事実としての実／虚構の境界を動かす力はない。当初の実／虚構の二分法が一般化されることによって分析の際の解像力を失ってきってしまうのである。これは、前期 Goffman に特徴的な「意志に定位する文体」に内在する難点である。

第二の難点は、「自己」の分析にとってはよクルーシナルり致命的なものである。先に述べたように、Goffman の論考において重要な位置を占めるいくつかの概念は、意図という観点から、利己的／非利己的の二つに分類される。この分類が正確かつ厳密であるかどうかは更なる考究を必要とするであろうが、Goffman が、意図あるいは意志と接続させつつ行為類型の記述を行っている、ということは明らかである。そして、このことが Goffman の論考に見え隠れする「自己」を「見なされる自己」=外面と「表現する自己」=意図との二側面においてとらえる、という理解(↳ Lofland〔1980〕, 佐藤〔1985〕など)

を支えてきたのだ。しかし、ここには重大な陥穽がある。すなわち、Goffman は、意図に応じて外面を操作する行為者を描いたのであるが、われわれに見ることができるのは外面だけなのである。内面は不可知であり、それは斟酌することしかできない。よって、Goffman が——曖昧な表現を用いて確定を避けながらも——言及している意図はすべて、行為者の最終的な意図と一致しているという保証はどこにもないのである。

例をあげてみよう。儀礼的行為あるいは通常の自己呈示と戦略的行為(たとえばスパイの日常的営為)とは、状況規範に従うことにおいて一致しているのであるから、もし完璧に遂行されたなら、外形からは区別できない。われわれはそれをどこで見分けるのだろうか?あるいは、《メリーゴーラウンドの乗馬に関する限りでは、八歳の子どもが示す役割距離はその状況の責務的ではなく、典型的な部分である。しかしながら、この少年の男らしさにとっては、役割距離を表現することは責務的なものである》(Goffman〔1961a=1985 : 160—161〕)という記述を想起してみよう。これは、主として自己の能力を示すため、と考えられていた役割距離行為が、責務的、すなわち行為者にとって外在的な動機によってなされることもある、ということを示唆したものである。この場合の八歳の少年の内面は「能力を示すふりをする」という風に斟酌できる。しかし、更に考えるならば、この「ふりをする」のが最終的な彼の意図であると断定できるだろうか? Goffman の分析は、外面と乖離した意図の存在を示唆するものであったのだから、外面と乖離した意図のよう^に見られるものがまた新たな外面であり、更にその奥に意図が隠されている、という可能性は常に否定しえないのである。これはいわば、外面と

意図の無限連鎖であり、有名な「自我の無限後退パラドックス」と論理的に同型の難点である。

前期 Goffman は、上記のような難点に多少は気づいていたかもしれないが、直接ぶつかることはなかった。それは主に、彼の独特の文体に起因する。すなわち、外面について語るとき、彼は客観的＝三人称的な描写を行なう。そして、なるべくその視点から分析を貫徹することをめざしているようである⁽⁸⁾。しかしながら、いつの間にかそれは主観的＝一人称的な心理描写を混入させているのである⁽⁹⁾。したがって、彼の論考は、社会的拘束すなわち役割期待や状況規範と、個人の自由意志に基く投企との境界を曖昧にさせたまま、とすれば（通常の役割理論などとは葛藤の生ずるレベルに多少の差はあるものの）社会と個人の実体的な二項対立を描く、ということになってしまうのである。

II-(2). 後期 Goffman.

後期 Goffman の論考において中心となる分析概念は言うまでもなく「^{フレイム}枠組」である。この概念は、ものごとを区切る枠のようなもので、それがあつたためにその内容物が文字通り受容されたり隠喩として受けとられたりするようなものを意味する。すなわち、現実であるか虚構であるかは、メッセージの相違によってではなく、メタ・メッセージの相違によって判断されることになる。行為の外形が似通っていてもそれが「本気」（＝現実）に見えたり「演技」（＝虚構）に見えたりするのは、その時同時に（あるいはそれ以前またはそれ以後に）出されるある種の信号の有無によるのである。そして、その種の信号＝手がかり（cue）がメタ・メッセージと呼ばれるものであり、「^{フレイム}枠組」とはそれを乗せるものでもあるのだ。

このような考え方のメリットは、現実と虚構との区別を、演技の有無、ひいては演技する意志の有無に拠って論定しないでもよいことにまず求められる。つまり、前期 Goffman における第一の難点としてあげた、現実と虚構を描写するにあつた難点が克服されるのである。これによって、たとえば「無意識のうちに演技する」あるいは「自分では意図していないのに演技しているように（＝わざとらしいと）見られる」といった行為・表出について、メタ・メッセージをあらわす手がかりを指摘することによって整合的に記述することができよう。そしてまた、Goffman の分析も、行為者の意図に定位して分析する傾向をはなれ、状況の組成に関する構造論的な分析にむかいつつあるといえる。たとえば、状況定義に関する W.I. Thomas の議論（「人が状況を真と定義したならば、それは結果において真となる」）にして、Goffman は、《「状況の定義」はほとんど常に見出されるが、状況の定義の中にいる人がその定義を創造しているのではなく、状況が何たるべきかを正しく評価しているのだ》（Goffman〔1974：1〕、強調は原著者）と述べる。そして、その状況定義の成立については、《状況定義は、できごとを支配する組織化原理とわれわれの主観的包絡によって立てられる》（Goffman〔1974：10〕）と述べている。

ところで、この方向での Goffman の分析と、先に述べた前期 Goffman の第二の難点とは、どう関係づけられたらよいであろうか。後期 Goffman は、前期 Goffman の第二の難点をも克服するものといえるだろうか。

この問題の解決は、非常に微妙かつ困難であると言わざるをえない。これは、いわば、状況定義を決定づける手がかりを行為者の意志とは独立に確定したうえで、それが行為者の意図的

な操作によるものであるか否かについてもう一度考察する、という手続での分析を必要とする。そして、状況定義を決定づける手がかりが行為者の意図的な操作による、と認められるならば、その手がかり＝メタ・メッセージによって、状況に呈示されているメッセージ（メタ・メッセージが「本気」を示す場合）あるいはメタ・メッセージ（メタ・メッセージが「演技」を示す場合）の内容が行為者の自我内容として想定されるし、逆に、状況定義を決定づける手がかりが行為者の意図的な操作による、とは認められない場合には、さらに行為者の意図を示す手がかりが捜されることになる。

ところで、自己の呈示とはそもそも状況の定義の投企の重要な一部分をなすものである（→ Goffman〔1959＝1974：1－18〕）ゆえに、このメタ・メッセージ操作の帰属決定プロセスは、コミュニケーションにおける意図の読みあいと似通った相貌を示すことになる。Goffmanは、意図の読みあいの過程の分析において、意図的表出と漏洩的表出とを分け、漏洩的表出が行為者の真意をあらわしがちであること、したがって漏洩的表出を行為者が統制できるならば意図の隠蔽の強力な手段となること、しかしそれは行為者の能力の限界ゆえに、あるいは「計算された何気なさ」を見通す術の相対的優位のゆえに、表出を読みとる側＝オーディエンスがコミュニケーションにおいて優位を保つ、という解答を与えている（Goffman〔1959＝1974：8－10〕）。これは、われわれの日常経験と整合的であり、その限りで説得的な意見である。しかし、当初の意図的表出／漏洩的表出という二分法が行為者の真意のありかを正確に示しているという確証は、やはり、得られない。客観的＝三人称的な表出と、主観的＝一人称的な意図とを完璧に架橋するのは、やはり無理なのであ

ろうか。

この読みあいのプロセスが、理論上は無限連鎖をなすことは明白である。しかし、後期Goffmanの^{アプローチ}接近法によるならば、この無限連鎖も、メタ・メッセージを示す手がかりを求めることによって顕示化し、後づけることが可能である。よって、ある行為者の投企の起点がどこにあるのか——彼は「本気で」行為しているのか、それとも「演じて」いるのか、あるいは「演じることを演じて」いるのかetc.——を、外見から措定することはできる。そして、いささか大胆ではあるが、次のような仮説を提出してみよう。すなわち、「演技する意志」が重層をなす場合には、行為者の自己意識もこのような外見からの措定を通じて、彼自身によって斟酌されるものである、と。これは、前期Goffmanとは逆の方向での飛躍であり、客観的＝三人称的な視角の貫徹によるものである。

このような立場に対しては、個人の自由意志によって投企を擁護する立場からの論難がふりかかってくるのが予想される。しかし、前期Goffmanの検討で見てきたように、自由意志はとらえにくく、また、容易に無限後退的な懷疑へと落ち込んでいってしまうものである。そこに自由意志がある、と言っただけでは不十分で、どのような形の投企が自由意志によってなされているかが認定できなければ、自己意識の内実はつかみきれない。行為者が自らを語る内容にのみ依拠するのではなく、外見によって観察可能なすべてのものに依拠して、いわば、独白による主観的＝一人称的な「自我論」から、客観的データによる三人称的な「自己現象の社会学」へと分析を転回させてゆくことが、今後の「自我」の研究のとりべき途である。

Ⅲ. 結論

以上においてわれわれは、相互行為論との接続において展開される自我論の主潮流であるシンボリック相互作用論および Goffman の分析を検討しつつ、単純な「I-me」図式、行為者の意識に定位した「演技」論的な接近、およびその根底に横たわる一人称的=独白的な視角の限界を確定しつつ、自我論の新しい方向、すなわち三人称的な視角による、いわば「自己現象の社会学」ともいうべき接近を提示してきた。この方向は、その端緒が見出されたばかりであるが、これからの展開、特に、相互行為論以外の社会理論との接続において考察される自我論の検討への応用が期待される。

試みに一例をあげてみよう。Erikson 流のアイデンティティ概念(↳ Erikson〔1968〕など)に対し、Goffman の分析は、自己の状況依存性を強調することにおいて対照的である(↳ 草津〔1977〕〔1978〕)。しかし、先に検討したように、Goffman は行為者の意図に定位する一人称的な文体から抜け出しきれなかった部分を、特に前期において、残存させていた。したがって、自由意志の存在に最終的に依拠する Erikson 流の分析に対し、強い批判力を持ちえなかった。両者はともに実体的・経験的な「自由意志の感覚」に信をおいていたのである。このような分析は、われわれの経験の記述において一定の性能を発揮するものの、人間の自由意志のあまりの可塑性ゆえに、社会と個人の自由意志との関係を見定めにくい。一種の極限状況ともいえる「全制的施設」における人間の生き方、すなわち《個人的アイデンティティの意識は……世界の様々な亀裂を住处としている》(Goffman〔1961b=1984:317〕)という事情が、この可塑性を端的に示している。

しかし、われわれが日常生活において「役割

からの疎外」とでもいうべき意識をもつことがあるのも事実である。この社会と個人の意識との微妙な関係を示すためには、自由意志を記述枠組の視点に忍びこませることなくその様態を記述しなければならない。あるいは、相互行為のなかのどこに自由意志が存するのか確定しなければならない。そして、自由意志の座の確定は、しばしばメタ・メッセージの解釈によって行なわれるのである。たとえば、「モラトリアム」という、一時非常に喧伝された概念(↳ 小此木〔1978〕)は、アイデンティティの意識実体的・経験的な欠如ではなく、アイデンティティ、すなわち近代社会における職業 etc. の社会的地位の主体的な選択をあらわすメッセージあるいはメタ・メッセージの欠如態として位置づけられる。そしてまた、この位置づけは、単に相互行為の一局面にとどまらず、その通時的な布置のなかでどこに主体性をあらわすメタ・メッセージが書き込まれるか、という問題の拡張を提起するものである。すなわち、ひとつの身体が担う多様な役割のうち、どれがより重要な自己意識の構成要素となるか、という問いである。そして私は、この布置の構造的な変遷を社会構造の変動との関連において問う「自己一貫性」論こそが近い将来における自我論の課題となるべきことを提唱する。この方向によってはじめて、自我論は、思弁的、かつ西欧近代的な限界から脱することができるのである。

注

- (1) 現象学的社会学、特に Schutz の論考において、コミュニケーションの可能性に対する疑義が提出されている部分も見うけられる(↳ Schutz〔1962:116-117→1970=1980:5-6〕)。このような立場は、意識の明証性を根本に据えて立論を行なうものであるが、Schutz においては、

その論理的な手法である現象学的還元あるいは反省が、社会科学の基礎づけの議論においても「生活世界」の記述においても貫徹されていない(→山口〔1981〕, 吉沢〔1984〕)。よって、自我も社会も所与である, という論理構成, およびそれに付随する調和的な人間・社会観においてシンボリック相互作用論と変わるところがなくなってしまう。

- (2) 主体性(「I」)と拘束性(「me」)を社会化の差によって説明するのはよくあるタイプの説明である(→Rose〔1962〕など)。しかし, どのような社会化の差によるのか具体的に特定するには, 膨大な記述を必要とするだろう。多くの論者はそこまで論をすすめず, 単に宣言するのみである。
- (3) このために, Goffman を実存主義者と見做したり(→Lofland〔1980〕) 構造主義者と見做したり(→Gonos〔1977〕, Maning〔1980〕) する評価の差が出てくる, と考えられる。
- (4) Goffman 自身は, 「醒めた」行為の動機を私的利益に即したものに限定するのを避ける旨を言明したり, (Goffman〔1959=1974:20〕), エゴが行為によって他者の状況定義に影響を与える際の動機を①徹底的に計算づく②無意識の

うちに③意図的かつ意識的だが, 所属集団や地位による要求に従った, という三つに整理したり(Goffman〔1959=1974:7-8〕)して明言を避けている。ただし, たとえば上記の三分法にしても, 彼の描写する様々な行為が①~③のうちどの動機によるものか明示されていないため, 十全に活用されているとは言い難い。

- (5) この図は, Goffman の分析に即して整理することを目的としたものであるが, Goffman 自身の体系的整理の欠如および表現の曖昧さのため, 彼の提出した概念すべてを盛り込んで整理することはできなかった。したがって, その限りにおいてこれは暫定的な整理である。
- (6) Goffman〔1969〕参照。
- (7) Goffman〔1963a〕参照。
- (8) たとえば, Goffman〔1963b=1980:40-47〕の「関与」に関する考察を見よ。
- (9) このような視点の動揺ゆえに, 「Goffman が本当はどのような立場にあったか」ということを確定するのは殆んど不可能であろう。むしろ, 「Goffman から何が学べるか」という点に議論を限定する方がはるかに建設的である, と私は考える。

文献

Blumer, Herbert 1969 Symbolic Interactionism: Perspective and Method, Prentice Hall.

Ditton, Jason (ed.) 1980 The View from Goffman, Macmillan.

江原 由美子 1982 「憑依と離脱——社会と演劇に関する覚え書——」, 『ソシオロギス』6:62-72。

Erikson, Erik H. 1968 Identity: Youth and Crisis, Norton.

船津 衛 1976 『シンボリック相互作用論』, 恒星社厚生閣。

————— 1983 『自我の社会理論』, 恒星社厚生閣。

Goffman, Erving 1959 The Presentation of the Self in Everyday Life, Doubleday. = 1974 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』, 誠信書房。

- 1961a Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction, Bobbs-Merrill. = 1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』, 誠信書房。
- 1961b Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates, Doubleday. = 1984 石黒毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常世界』, 誠信書房。
- 1963a Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity, Prentice Hall. = 1970 → 1980 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』, せりか書房。
- 1963b Behavior in Public Places, Free Press. = 1980 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』, 誠信書房。
- 1969 Strategic Interaction, Univ. of Pennsylvania Press.
- 1974 Frame Analysis, Harper & Row.
- Gonos, George 1977 "'Situation" versus "Frame": The "Interactionist" and the "Structuralist" Analysis of Everyday Life", American Sociological Review 42-6: 854-867.
- 厚東 洋輔 1970 「パーリンズと「社会秩序」の問題」, 『思想』 556: 23-38。
- 草津 攻 1977 「アイデンティティと社会」, 『現代社会学』 4-1 (7): 32-67。
- 1978 「アイデンティティの社会学」, 『思想』 653: 108-142。
- Lewis, J. David 1979 "A Social Behaviorist Interpretation of the Meadian "I"", American Journal of Sociology 85-2: 261-287.
- Lofland, John 1980 "Early Goffman: Style, Structure, Substance, Soul", Ditton (ed.) [1980: 24-51]
- Manning, Peter 1980 "Goffman's Framing Order: Style as Structure", Ditton (ed.) [1980: 252-284]
- Mead, George Herbert 1934 Mind, Self and Society---from the Standpoint of a Social Behaviorist, Univ. of Chicago Press. = 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』, 青木書店。
- 小此木 啓吾 1978 『モラトリアム人間の時代』, 中央公論社。
- Rose, Arnold M. 1962 "A Systematic Summary of Symbolic Interaction Theory", Rose (ed.) [1963: 3-19]
- (ed.) 1962 Human Behavior and Social Processes, Routledge & Kegan Paul.

- 佐藤 毅 1978 「コメント 社会的相互作用をどうとらえるか」, 『社会学評論』 29-2 (114) : 43。
- 1985 「解説 初期ゴッフマンとその自己論」, Goffman (1961a=1985:199-237)
- Schutz, Alfred (Natanson, Maurice (ed.)) 1962 Collected Papers I, Nijhoff.
- (Wagner, Helmut R. (ed.)) 1970 On Phenomenology and Social Relations, Univ. of Chicago Press. = 1980 森川真規雄・浜日出夫訳『現象学的社会学』, 紀伊國屋書店。
- 恒松直幸・橋爪大三郎・志田基与師 1982 「Parsonsの構造-機能分析——彼自身による展開/その批判的再構成」, 『ソシオロギス』 6:1-14。
- Turner, Ralph H. 1962 "Role-Taking: Process Versus Conformity", Rose (ed.) [1962:20-40]
- Wrong, Denis H. 1961 "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology", American Sociological Review 26-2: 183-193.
- 山口 節郎 1981 「「現象学的」社会学は現象学的か——シュッツの「三つの公準」をめぐって——」, 『社会学評論』 32-3 (127) : 36-53。
- 山下 雅之 1983 「行為理論と秩序問題」, 『ソシオロジ』 28-2 (88) 17-37。
- 吉沢 夏子 1984 「社会学と間主観性問題——“主観主義”批判・再考——」, 『社会学評論』 35-2 (138) : 2-16。

(いしかわ ひろあき)